

不登校・引きこもりの若者に対する社会参加支援活動の試み

—小グループによる清掃アルバイト実践を中心に—

木曾 俊介* 監物 和夫* 小松 淳平*

倉本 英彦**

* (社) 青少年健康センター ** (医) 北の丸クリニック

<要旨>

青少年健康センターでは、1993年12月から社会参加支援活動を実施している。今回はその望ましい進め方を検討するための第一段階として、これまでの実施方法、メンバーの感想、実践事例を整理し、メンバーの適応評価を試みた。メンバーの感想からは、メンバーが概ね当活動を好意的に捉えていることがわかった。実践事例では、新たに社会参加した事例や途中でやめてしまった事例の他に、当活動に定着したがそこからなかなか抜けられない事例が注目された。適応評価においてメンバーが好ましい適応を示した項目は「アルバイト中の不安・緊張度」などの7項目、やや好ましくない適応の項目は「欠勤状況」などの2項目、ほとんど変わらない項目は「他のメンバーへの攻撃性」などの4項目であり、多くの項目でメンバーの好ましい適応状態が確認された。

<キーワード>

不登校、引きこもり、小グループ、清掃アルバイト、社会参加支援活動、包括的対応

はじめに

近年、不登校¹⁾²⁾・引きこもり³⁾などの青少年問題は複雑さと深刻さの度を深めている⁴⁾⁵⁾。

青少年健康センターでは、そうした問題の解決に寄与するためにいくつかの対応策を用意し、それらを有機的に組み合わせる包括的対応を行っている。それを効果的に進めるためには、それぞれの対応を充実させることが肝要であり、これまで各対応策の望ましい進め方を掘り下げてきた。

その一環として、1993年12月より社会参加支援活動⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾を進めている。ある程度問題の改善が見られた引きこもりの青少年を対象とし、小グループによる清掃アルバイトを通してメンバーの社会参加促進を目指している。しかしその進め方については、目先の条件や環境に左右されやすく、多くの課題が残されている。

そこで今回はその望ましい進め方を検討するための第一段階として、これまでの実施方法、メンバーの感想、実践事例を整理し、メンバーの適応評

価を試みた。

I これまでの実施方法

1993年12月から甲社が請け負っているAビル(1998年12月に終了)と、1995年12月以降からは乙社のB、C及びDビルの4カ所で実施した。

1 概要

これまでの実施方法は、以下の通りである。

- ①目的: 社会参加のためのきっかけ作り。
- ②対象: ある程度の問題の改善が見られ、社会参加に意欲のある人。
- ③グループ: 5名前後で構成する。
- ④作業内容: オフィスビル清掃。主に床の洗浄とワックス塗り。
- ⑤日時と場所: 毎週あるいは隔週の土曜日もしくは日曜日、日中の7時間。東京駅周辺。
- ⑥指導スタッフ: ビル管理会社の現場責任者及び

当センター所属のスタッフ。

- ⑦アルバイト料:各社規定の金額(一般のアルバイトと同額)。
- ⑧運営委員会:担当スタッフ、当センター担当理事及び担当医が毎月1回集まり当活動について検討を行っている。必要に応じて、主治医、家族及びビル管理会社と連絡調整を行う。

2 主な工程

以下、一日の主な工程を紹介する。

①作業開始前

メンバーの多くは通常作業開始10分前には出勤するが、中には遅刻しないように30分前から来ている人もいる。出勤すると、作業着に着替えたり、作業の準備を行う。また家で朝食を食べてこなかった人は、途中で何か買って来て食べている。

②作業開始直後

ビル管理会社の現場責任者から作業予定を聞き、当センターケアスタッフとメンバーで役割分担を行う。作業分担の仕方は、各ビルによって異なるが、一人に負担がかかり過ぎないように平等に分担するのを基本としている。ちなみにB及びCビルでは事前にスタッフ、メンバー間で作業分担のローテーション表を作成しており、それに基づいて分担を交替している。またその日の各自の体調や事情も考慮し、お互いが了解のうえ、役割分担を変える場合もある。

③作業中

メンバーの多くは、参加し始めた頃は別として、作業内容をよく理解している。そのため、自分が何をしたらよいのかと考えたり、立ち止まったりしている者は少ない。特に作業の中心となる「床洗浄とワックス塗り」の前後は役割分担がはっきりせず、混乱しがちになるが、各自の判断で手の空いた者から作業を進めている。「床洗浄とワックス塗り」では、役割分担がはっきりしているので、各自の役割を進めることになる。ところが、この作業はチームで進めており、全体の進行具合を考えながら各自の役割を果たすことが必要である。一人が熱心のあまり丁寧になり過ぎると、全体の進み具合が遅くなり、そ

の日のノルマが果たせなくなる。その逆に早く進め過ぎると、丁寧さに欠け、全体の出来栄が悪くなる。実際のところ、先頭の人の方が方向とスピードを調整しているが、「早すぎる」など後続の人たちから声がかかることもある。また作業内容についても「洗剤の量が多すぎる」「汚れが落ちていない」「ワックスに斑がある」などお互いに指摘し合い、修正している。時に感情的になる事もあるが、多くの者は仕事として冷静に受けとめている。技術的な事柄については、ビル管理会社の社員が時々見回りに来て、適切なアドバイスや指導を行っている。また休憩時や昼食時に皆で話し合いをすることもある。

④休憩及び昼食時間

休憩時間は、午前30分、午後15分間ぐらいある。はじめのころは、仕事がきつくぐったりしたり、皆となじめずに孤立している者もいるが、慣れるにつれて皆と雑談を楽しんだりすることが多くなる。昼食時間は60分間。弁当を一緒に食べる。また外に食べに行く人もいる。たまに小遣いを持っていなかったり、ダイエット中で、食事をとらない者もいる。食後は昼寝、雑誌読み、雑談など、各自様々に過ごしている。

⑤作業終了後

着替えをしたり、手や顔を洗ったりして帰り支度。皆の顔が緊張感から解放され、ほっとする瞬間。次回の確認をし、全員でビルを出る。他所に寄ったり、何人か連れ立って出掛ける人もいる。

II メンバーの感想

日頃から聞かれるメンバーの主な感想を整理すると、表1に示す通りである。

現場の雰囲気に関しては「社員の多くは親切」、「ケアスタッフがいっしょなので安心」など、清掃作業については「専門的な知識が身についたのはうれしかった」、「体を使う仕事が好き」など、グループについては「皆も同じような問題を持っているので自分のことも理解されやすかった」、「個人的なことをきかれないので気楽だった」、「友だちができた」などの感想が多く聞かれた。また「初めてアルバイトに参加できた」、「他のアルバイトに入るきっかけとなった」など社会的な広がりを感じさせる感

想もあった。

メンバーの多くは、当活動の中で何らかの意義を見出している。しかし、一部のメンバーは清掃作業に対して「清掃はきらい。仕方がないからやっている」、「このようなやり方で別の仕事をやりたい」などと訴えており、その仕事の内容については今後検討していきたい。

表1. メンバーの感想

1 現場の雰囲気
<ul style="list-style-type: none"> ・ビル管理会社の社員の多くは明るく、親切でやさしかった ・ビル管理会社の責任者が清掃に対してプライドを持っていて好感がもてた ・ケアスタッフがいっしょなので安心
2 清掃作業について
<ul style="list-style-type: none"> ・専門的な知識が身についたのはうれしかった ・体を使う仕事が好き ・きれいになったところを見るのが好き ・清掃の仕事ならやっていける自信がついた ・清掃の仕事はきらい。仕方がないからやっている。
3 グループワークについて
<ul style="list-style-type: none"> ・皆も同じような問題を持っているので自分のことも理解されやすかった ・個人的なことをきかれないので気楽だった ・協調性や思いやりの気持ちを学んだ ・友だちができた
4 全体について
<ul style="list-style-type: none"> ・初めてアルバイトに参加できた ・朝起きられるようになった ・週一回位のアルバイトがちょうど良い ・他のアルバイトに入るきっかけとなった ・少しでも働いていると気分的に楽になる ・お金が入ったので、行動範囲が広がった ・普通の仕事を念頭に置いて参加すべき ・このようなやり方で別の仕事をやりたい

III 事例

当活動に参加したメンバーの動向をみると、

1. 当活動をやめ、新たに社会参加(就職、他のアルバイト、進学など)した、
 2. 長期間当活動と他の社会参加を並行している、
 3. 長期間当活動のみに留まっている、
 4. 短期間でやめてしまった、
- の4つに分けられた。ここではそれぞれの事例について報告したい。

1 事例K 34歳 男子(当活動をやめ、新たに社会参加した)

(1) 活動開始までの経緯

高校1年(17歳)で不登校になり、中退した。19歳時に、両親が心配して、M病院の精神科に連れて行ったが、通院は長く続かなかった。その後も引

きこもっていたが、22歳ごろ、「このままではよくない」と自覚し、自ら進んでKクリニックを受診した。医師に投薬と当センターの短期宿泊施設(ハウス)をすすめられ、入寮した。27歳までの5年間に入退寮を3回繰り返した。1993年12月当活動が開始されると、医師にすすめられ、ハウスを退寮して、家から当活動に参加することになった。

(2) 当活動での経過

27歳ではじめてアルバイトに参加した。ハウスでの馴染みのメンバーが多く、スタッフもついていたので、安心してはいたが、実際に活動に参加すると、著しく緊張した。始めの頃は休んだり、遅刻して、アルバイトが続けられなくなるという強い強迫観念があった。そのため、アルバイトの前日から緊張が強くなり、眠れない日が多かったが、遅刻を恐れるあまり、無理して出勤1時間前に出社していた。

半年経った頃から、徐々に「週一回でも働いていると、気分的に楽。何もしないと肩身が狭い。」「お金が入ると助かる」などアルバイトに対する意識の変化が現れ、続けられるという自信が付き、欠勤・遅刻に対する不安も軽減した。作業に関しては、始めのうちは、上手くやろうと意識し過ぎて失敗が目立った。特に緊張すると、腕や指が震え上手く清掃機械や用具が扱えなかった。その上作業速度も遅く、皆に迷惑をかけていた。K君としては不安が募ったが、一緒に作業しているメンバーはK君を好意的に見ていた。また、現場の責任者も根気強く、やさしく指導した。K君自身も努力して、少しずつ作業技術が向上した。その頃新たなメンバーが加わり、K君が作業技術を教える機会が多くなった。作業速度は遅いものの、正確な作業に新メンバーから好感を持たれた。その後も教える機会が増え、その都度自信を深めていった。メンバーには顔馴染みが多かったが、アルバイトをしながら皆とうまく付き合う自信はなかった。特にはじめの頃は作業技術に不安があり、皆から白い目で見られるのではないかと感じていた。しかし、皆も同様の悩みを抱えていたため、責められることもなかった。むしろ、ひたむきに作業に取り組むK君の姿は皆から好感をもたれ、さらに技術が向上するにつれ、皆から信頼された。K君もそれを自覚し、皆と楽に付き合うようになった。

しかし、他の職場同様、メンバーの間で軋轢がなかった訳ではない。特に年下のメンバーの粗暴

な言動に怒りを感じるがあった。このような場合、K君は直接彼に怒りをぶつけることもあったが、大半は気が合うメンバーやスタッフに話したりして、怒りを解消していた。皆に受け入れられるだけでなく、自分からも皆と関わりをもつようになった。

一方、ビル管理会社の責任者や社員にはどう接したらいいか、かなりの不安を感じていた。暫くは、必要最低限の会話しかなかった。ところが、責任者はK君のまじめな勤務態度を見ていて、次第に話し掛けることが多くなった。K君は最初戸惑っていたが、責任者に段々と馴染むようになった。同時に他の社員とも関わりを楽に持てるようになった。

アルバイトを始めて1年が過ぎ、多くの不安も解消され、自信が芽生えてきた。その後順調にアルバイトが続いた。2年を過ぎる頃から、もう少しアルバイトの日数を増やしたいという気持ちが生まれた。幸いにも、当活動での別のグループに欠員が出たため、兼任することになった。ますますアルバイトに対する自信を深めていった。3年半が経過した頃、ビル管理会社の責任者から他のビル管理会社の正社員の口を紹介された。K君としては、社員になりたいという気持ちはあったが、それ以上に社員としてやれるかという不安が強く、結局断った。その後もアルバイトを続けた。その1年後、再度、責任者から社員の口をすすめられた。今度も不安がなかった訳ではないが、やれそうと言う気持ちも高まっていて、医師やスタッフなどのすすめもあり、それを受け入れた。4年4ヶ月目に当活動をやめ、某ビル管理会社に就職した。

2 事例S 35歳 男子(長期間当活動と他の社会参加活動を並行している)

(1)活動開始までの経緯

高校と大学時代に不眠症に悩まされ、やっとの事で大学は卒業したものの、ほとんど家に引きこもっていた。高校時代からいくつかの医療機関を転々としたが、不眠症は一向に改善しなかった。S君は不眠症さえ治れば、いろいろな事ができると考えていた。その頃、Hクリニックで治療を進めていたが、その医師から当活動を紹介され、いったんKクリニックを受診し、1996年3月からCビルの最初のメンバーとして当活動に参加した。

(2)当活動での経過

開始当初は、清掃作業に対する不安はなかった

が、不眠症のため朝起きられるかどうかを心配していた。S君としては、活動前日は特に眠れないので、欠勤や遅刻を恐れ、前日徹夜して出勤することが多かった。しかし、作業中に眠そうにしていることはあったが、作業自体はしっかりしていた。半年を経た頃から、徹夜して出勤するのは相変わらずであったが、休憩時間や昼休みに仮眠するようになった。短い時間を有効に利用していた。S君は無理して前日に眠ることよりも、仮眠して仕事を乗り越えようと考えていた。もともと作業能力も高く、仕事もしっかりしているので、皆から信頼された。S君自身もリラックスして作業に当たっていた。その頃から活動前日に少しずつ睡眠が取れるようになってきていた。

1年半を経た頃、現場の責任者から他の日にも来てもらいたいとの要請を受け、当活動も含めて週に3日働くことになった。時々徹夜して出勤することもあったが、以前よりも睡眠が取れるようになり、不眠症もかなり改善した。活動の中心的なメンバーとして活躍していた。その頃から音楽関係のアルバイト探しを始め、2年を過ぎる頃に、当活動以外の清掃の仕事をやめ、音楽関係のアルバイトに就いた。自分の希望したアルバイトに就けたことで大いに満足していたが、その責任者の高圧的な態度に腹を立て半年でやめてしまった。その後も2つの仕事に就くが、責任者や同僚と些細なことで口論になり短期間でやめてしまった。S君はこれまで不眠症さえ改善すれば問題がないと考えていたが、対人関係の問題があることを自覚した。現在は、他のアルバイトを続ける自信が持てなくなり、当活動のみに留まっている。当活動に関わってから、今年の3月で7年目を迎えた。

3 事例F 34歳 男子(長期間当活動のみに留まっている)

(1)活動開始までの経緯

高校2年の1学期、不登校になり、Q病院の精神科病棟に入院した。3年時にはKクリニックを受診し、その医師から当センターの短期宿泊治療施設(ハウス)をすすめられ、入寮した。ハウスから通学し、高校を卒業した。その後は、ほとんど家で過ごしていた。一時的にアルバイトに就いたり、通信制大学に入学したが、すぐにやめてしまった。この間Kクリニックで治療を受け、また当センターの電話

相談やデイケアを利用した。デイケアメンバーが当活動に参加しているのを知り、医師のすすめもあって、2000年の8月からCビルの活動に参加した。

(2) 当活動での経過

当活動のメンバーの多くはデイケアでの顔なじみなので、安心していましたが、清掃作業については強い不安があった。開始当初は研修期間として現場や当センターのスタッフ、また先輩メンバーから作業について指導を受けた。F君はこれまでのメンバーに比べて理解が遅く、またわからないことを繰り返して聞いたり、指さしなどの確認行為が多かった。清掃機械や用具の取り扱いにおいても不器用さが目立ち、時には壁や備品などを傷つけ、他のメンバーを驚かせた。F君は真面目に仕事に取り組んでいたが、緊張すると自分のやっていることが分からなくなってしまうところがあった。スタッフや他のメンバーもこの点はよく理解していて、F君に分かりやすくアドバイスしたり、優しく見守った。F君も他より作業能力が劣っていることを自覚していて、皆のアドバイスを素直に受け入れ、自分のできる仕事は積極的に引き受けた。仕事上の問題は多かったが、他のメンバーとの関係は良好で、休憩時間などに皆と雑談を楽しんでいた。

8ヶ月後に新メンバーが加わり、2～3ヶ月で一通りの作業技術を身につけた。F君は自分の作業能力の低さを改めて痛感し、落胆した。はじめの頃から比べると少しは作業能力が向上したが、自分としては満足できなかった。この頃から、もっと満足できる仕事をしたいと考えるようになり、苦手な仕事に積極的に取り組むようになった。しかし、相変わらず失敗も多く、確認行為も続いていた。時々スタッフから強い注意を受け、一層落ち込んだこともあった。しかし、その後も諦めず、皆の励ましもあり、1年半過ぎには、床洗いの機械(ポリッシャー)の操作がようやくできるようになり、仕事の中で自分が役立っていると自覚するようになった。これまで自分は皆のお荷物と考えていたところがあったが、少し自信が芽生えてきた。間もなく、2年目を迎えようとしているが、自信を一層深めている。しかし、今のところ、当活動のことで頭が一杯であり、他の社会参加を考える余裕はない。

4 事例D 28歳男子(短期間でやめてしまった)

(1) 活動開始までの経緯

高校2年時に、脳腫瘍ができ、S病院で摘出手術を受けた。術後の経過は良好だったが、左手足に軽い麻痺が残った。高校卒業後は写真関係の大学に進学した。休みがちではあったが、大学を卒業し、写真関係の会社に就職した。しかし、1年後に、暗室での現像作業が辛くなり、退職した。この間、Kクリニックに受診した。また医師のすすめで、当センターの短期宿泊治療施設(ハウス)に入寮した。3ヶ月後に退寮して、会社に復帰したが、6ヶ月目に退職した。その後は、Kクリニックで治療を受けながら、当センターのデイケアや電話相談を利用した。1996年3月Cビルで当活動が開始されると、初代のメンバーとして参加した。

(2) 当活動での経過

初めてのメンバーということで、全員で清掃技術の研修を3日間受けた。左手足の軽い麻痺は、研修中は特に問題なかった。しかし、実際の活動が始まると、足場が悪かったりしてバランスを崩し、ふらつくこともあった。また重い清掃用具や機械を持つのが辛そうであった。それでも作業は無難にこなしていた。ハウスやデイケアでの顔見知りが多かったが、皆とは馴染めないでいた。しかし、当活動ではじめて知り合ったM君とは意気投合した。2人だけで話したり、行動することが多かった。また帰りに2人で居酒屋に行ったり、自宅に彼を連れて行って飲み明かしたりした。2人とも酒が好きだった。4ヶ月を過ぎた頃、他のメンバーは清掃作業にも慣れ、明るく作業に励んでいたが、D君は疲れているようで元気がなかった。また他のメンバーと口論して、怒り出すこともあった。6ヶ月目から欠勤が増えた。はじめの内は欠勤の電話連絡があったが、連絡なしで休むことが多くなった。スタッフが事情を聞いてみると、①夜眠れず疲れていて出勤できない、②活動に意味を見いだせない、③他のメンバーと上手くやれない、④清掃作業は楽しくない、ということであった。その後休んでいたが、8ヶ月目に退職した。

事例Kは、幸運にもビル管理会社の責任者の協力などがあり、社会参加が実現した。しかし、このような事例ばかりではない。事例Dのように当活動に合わなくてやめてしまう事例もあったことは残念であった。また事例S、事例Fのように当活動には定着したものの、そこからなかなか抜けきれない事例

もある。特に最近はそういう事例が増えている。

当センターとしては、これらの点を踏まえ、当活動の参加期間を限定したり、活動の進め方を工夫している。また、事前に社会参加の意欲を高めるために SST を主体とする社会参加準備グループ、当活動の参加者及び OB・OG をサポートするために月一回の社会参加支援活動フリースペースを設置した。

IV 適応状態の評価

当活動の望ましい進め方を確かめるために、メンバーの適応状態について評価した。その結果は表 2 の通りである。

事前に13項目からなる評価表を作成し、それに基づいて開始一週後と終了一週前あるいは現時点で各担当スタッフが過去の記録を参考にして、適応状態を三段階に評価した。

対象は、1993年12月から4ヶ所のビルで当活動に参加した男38名、女1名であった。活動開始当初の平均年齢は29.4歳、平均在職機関は31.4ヶ月であった。

開始一週後に比べて終了一週前あるいは現時点で良好な適応状態を示す項目は、「アルバイト中の不安・緊張度」、「他のメンバーとの親密性」、「スタッフとの親密性」、「職場上長との親密性」、「作業への参加状況」、「作業能力」、及び「他の社会参加の試み」の7項目であった。当活動を続けるうちに、不安や緊張感が軽減され、他のメンバー、スタッフ、職場上長とも親密性が高くなる傾向が見られた。また作業能力も高まり、積極的に作業に参加しようとする傾向があった。さらに他のアルバイトに就いたり、進学するなどの社会参加を試みようとする者が多くなった。

逆に、当活動を続けていると、やや好ましくない適応状態を示す項目は、「欠勤状況」、「遅刻・早

退状況」であり、緊張感が薄れ、気も緩み、勤務態度が悪くなる場合もあった。その傾向は、在職期間が長いほど強かった。

ほとんど変わらない項目は「他のメンバーへの攻撃性」、「スタッフへの攻撃性」、「職場上長への攻撃性」及び「問題行動」の4項目であった。しかも、攻撃性・問題行動共に通常はほとんど見られなかった。しかし、在職期間が長いメンバーの中にはまれに感情のもつれなどから激しい攻撃性や問題行動を呈するメンバーもいた。在職期間の問題は以前から指摘されていたが、当活動では個人差を考慮しながら期間を限定している。

まとめ

社会参加支援活動の望ましい進め方を掘り下げるために、これまでの実施方法、メンバーの感想、実践事例を整理し、メンバーの適応評価を試みた。これまでの実施方法では、概要と主な工程についてまとめた。メンバーの感想では、現場の雰囲気、清掃作業、グループワーク及び全体という点から整理した。感想の多くは当活動に対して好意的だったが、清掃という活動内容に批判的な意見が見られた。実践事例では4つを報告した。最近では当活動には定着したものの、そこから抜けきれない事例も見られた。当センターとしては、個人差を考慮しながら参加期間を限定するなどの工夫をしている。また事前に社会参加の意欲を高めたり、現メンバーやOB・OGをサポートする活動を開始した。適応評価において、メンバーが好ましい適応状態を示した項目は「アルバイト中の不安・緊張度」などの7項目、やや好ましくない適応状態の項目は「欠勤状態」などの2項目、ほとんど変わらない項目は「他のメンバーへの攻撃性」などの4項目であった。当活動を通して、多くの項目でメンバーの好ましい適応状態が確認された。

表2. 適応状態評価表

	開始一週後 (N=39)	終了一週前あるいは 現時点(N=39)
1. アルバイト中の不安・緊張度 (ほとんどない-1、中程度-2、強い-3)	2. 41	1. 16
2. 他のメンバーとの親密性 (ほとんど話さない-1、中程度-2、良好-3)	1. 38	2. 33
3. 他のメンバーへの攻撃性 (ほとんどない-1、中程度-2、強い-3)	1. 00	1. 10
4. スタッフとの親密性 (ほとんどない-1、中程度-2、良好-3)	1. 51	2. 28
5. スタッフへの攻撃性 (ほとんどない-1、中程度-2、強い-3)	1. 00	1. 18
6. 職場上長との親密性 (ほとんどない-1、中程度-2、強い-3)	1. 10	1. 97
7. 職場上長への攻撃性 (ほとんどない-1、中程度-2、強い-3)	1. 00	1. 08
8. 欠勤状況 (ほとんどない-1、中程度-2、多い-3)	1. 18	1. 54
9. 遅刻・早退状況 (ほとんどない-1、中程度-2、多い-3)	1. 21	1. 36
10. 作業への参加状況 (消極的-1、中程度-2、積極的-3)	1. 41	2. 33
11. 作業能力 (低い-1、中程度-2、高い-3)	1. 77	2. 54
12. 問題行動 (ほとんどない-1、ときに見られる-2、 しばしばある-3)	1. 10	1. 26
13. 他の社会参加の試み (ほとんどない-1、単発的にある-2、 定期的にある-3)	1. 08	1. 85

註)表中の数値は、各項目ごとのポイントの平均値を表している。

<文献>

- 1) 倉本英彦、「一般中学生の不登校等の問題行動と精神保健に関する疫学調査」、日本公衆衛生雑誌、第42巻、31-43、1995
- 2) 倉本英彦、「一般小学生の不登校等の問題行動と精神保健に関する疫学調査—一般中学生との比較より—」、日本公衆衛生雑誌、第42巻、930-941、1995
- 3) 斉藤環、「社会的ひきこもり」、PHP新書、1998
- 4) 倉本英彦、斎藤友紀雄(編)、「思春期挫折とその克服」現代のエスプリ 388、至文堂、1999
- 5) 倉本英彦、「いま思春期の子どもたちのところに何が起きているか」、児童心理、金子書房、第54巻第18号、86-95、2000
- 6) 木曾俊介、倉本英彦他、「特集 社会参加支援プログラム」、Newsletter No.18、青少年健康センター、1997
- 7) 木曾俊介、「訪問相談活動と社会参加支援活動」、128-137、現代のエスプリ 388、至文堂、1999
- 8) 木曾俊介、倉本英彦、「不登校・引きこもりに対する社会参加支援活動の試み(第1報)」、第20回日本社会精神医学会抄録集、64、2000
- 9) 倉本英彦、「(社)青少年健康センターにおける臨床的実践活動の内容と効果について」、国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要(創刊号)、45-54、2001